

はがれたベール

<2>

検証・設置審査

「ああ、また始まった……」

一九七五年から行われた東京電力柏崎刈羽原発1号機の安全審査の分科会。東京大助教授で耐震工学の専門家として参加していた秋山宏六は、ため息をついた。二人の地質専門家が、活断層の見方をめぐり延々と議論を続けたからだ。

二人とは、東大の松田時彦主客と地質調査所(当時)の垣見俊弘主客。そのやりとりだけで、午後一時に始まった会議が夜八時まで続かったこともある。秋山ら工学系の委員たちは「建物の耐震性を最後に確認する

のは、われわれ工学屋。活断層の話は、地質屋さんに知恵を借りたいだけなのに」との思いをのみ込み、辛抱強く待った。垣見も秋山の冷めた視点となじられたのを覚えている。断層の話は、地質屋さんに知恵を借りたいだけなのに」との思いをのみ込み、辛抱強く待った。垣見も秋山の冷めた視点となじられたのを覚えている。

去に起こしたM6・5級の東京電力柏崎刈羽原発の建地震記録を根拠にしている。だから十キロより短い断層には応用できなかった。試掘坑の入り口。当時、陸だが、数式で表すことが地質屋の分野で、松田式の登場は「画期的だった」と垣見。工学者もこれを見過さず、「便利な式」を見逃さず、「便利な式」を見逃さず、「便利な式」を見逃さず、

断層評価意識にずれ

「つくる」ために妥協許す

線には気付いていた。「地。そんな時代だった。

質学は自然が相手だが、工学は物を造らなければいけない。断層評価もどこかで割り切りが求められていた。垣見のいた地質調査所は旧通商産業省の下部組織。役人でもあった垣見は、地質学と工学との「橋渡し役」を自覚していた。

■金科玉条の式

垣見が感じていた工学者との意識のずれは、松田が専門誌上で七五年に発表した地震規模の計算式の扱いをめぐって如実に表れる。「松田式」と呼ばれる計算式は、活断層の長さから、起こり得る地震の規模(マグニチュードM)を推定する。十以上の断層が過

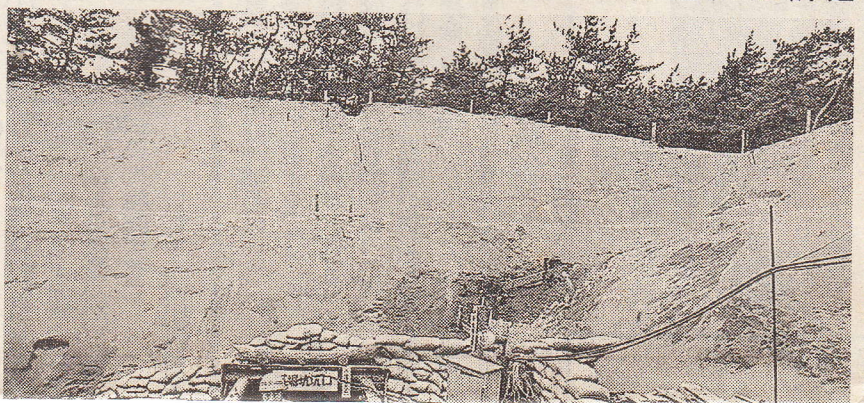
記。本来使えないはずの短断層にまで、式を当てはめるようになったのだ。工学者が式を都合よく利用したとの指摘に対し、秋山は反論する。「発電所の設計は、活断層の評価だけを考えているわけではなく、むしろ過剰なほど安全上の余裕をとっている」

■地質屋に非難

松田は自らの見解が生かされないとして審査の場を去った。一方の垣見は「多少の不満はあったが、役人の立場もあり避けては通れない」

揺らぐ
安全神話
柏崎刈羽原発

地質学と工学



断層の概念は、工学者の間で

当時はまだ新しかった活断層の概念は、工学者の間で

起り得る地震の規模(マグニチュードM)を推定する。十以上の断層が過

に始まった1号機の審査でも、焦点となった気比ノ宮(六)は「地盤はよくなくて

も設計で手当てすればいい

そして今、中越沖地震に

ちょうど松田式発表の年に

当時、審議を見守った元

安全審査

影響を及ぼ